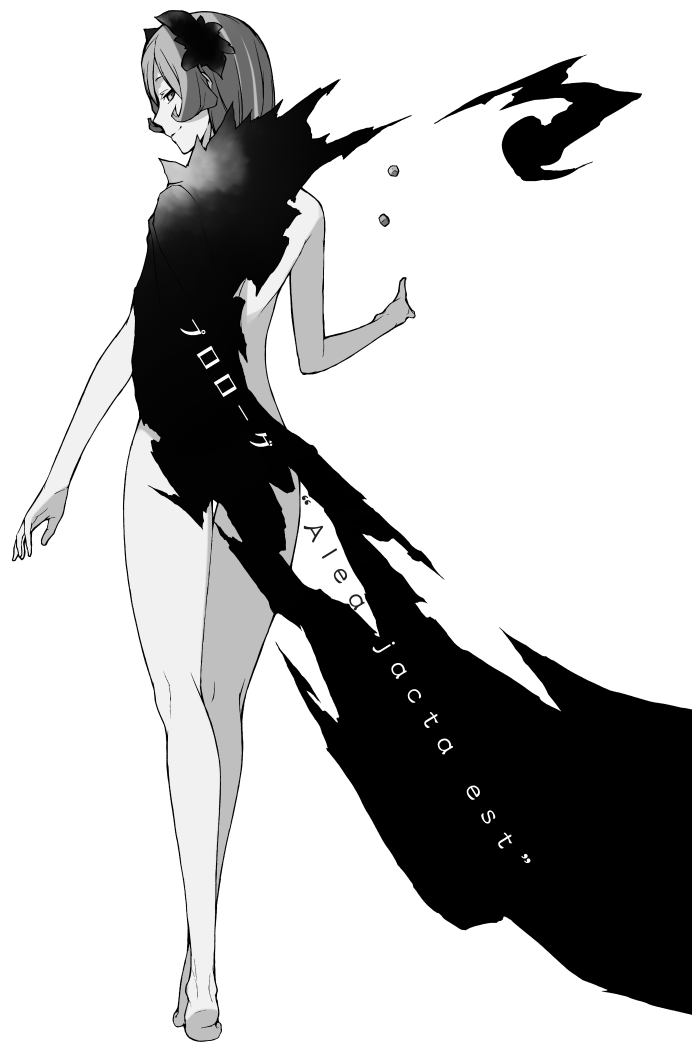


ダンジョンに
出会いを求めるのは
間違えるだろうか
3

大森 藤ノ
OMORI FUJINO
イラスト ヤスダスズヒト
YASUDA SUZUHITO

試し読み版



イラスト・デザイン
ヤスダスズヒト

「オッタル。あの子、また強くなったわ」
 重畳、ですか」

「ええ」

薄暗い室内。窓の外を包む宵闇が部屋の奥まではびこっている。

テーブルの上の魔石灯が蠟燭のようにほのかに揺れる中、フレイヤは静かに口端を上げた。

迷宮の真上に築かれた摩天楼施設。その最上階。

調度品の数は少ない。一級のスイートルームを彷彿させる広い室内に似合わないほど飾り気はないが、代わりに品のどれを取っても豪奢に過ぎていた。同時に部屋の内装と品よくあしらえてもある。

巨大な本棚に常識では考えられないほど大きなベッド、暗赤色でシックな絨毯。壁には境を挟んだ太陽と月の絵画がかけられている。

銀髪の女神はワイングラスを手に取りながら、選りすぐりの従者と一つの話題に興じていた。「見違えたわ。【ステイタス】がどうこうじゃないの。魔法という切っかけを一つ手に入れただけで、あの子の輝きは一層鮮やかになった……私の目には器が洗練されたように見える」

広い一室へ冷たく差し込む月明かりにグラスをかざし、ゆらゆらと光が反射する水面を眺める。

照らされる若い白ワインには色の深みはない。勿論味もない。

しかしフレイヤは、その透いた色こそ何事にも代えがたいと思っているかのように、己の銀瞳を笑みの形に細め、グラスに口付けた。

「器の発展……進境が著しいと？」

「そういうことになるかしら」

部屋の隅で顔色を変えることのないオッタルと、短く受け答えをする。

直立不動の姿勢で主神を見つめる従者は静かだった。

彼の錆色の瞳に見守られながら、そこでおもむろに、フレイヤはそろりと臉を半分下ろす。

「でも、一つだけ……一つだけ、輝きを邪魔する淀みがある。まるで枷のようにあの子を縛っているわ」

「……」

「そうね、十分に足る器はある。けれど、芯が足りない。いえ芯そのものはある、でもそれが曇って見える……何かが欠けているのか、何かが邪魔しているのか」

「オッタルはわからない？」とフレイヤは振り返り意見を求めた。まるで同じ男の子でしょう、と尋ねるかのよう。

巖のような獣人はしばし口を引き結び、主人の問いに答えた。

「因縁かと」

「因縁……？」

「はい。フレイヤ様がお話してくださった、その者とミノタウロスの因縁……払拭できない過去の汚点が、本人もあずかり知らない場所で棘となり、苛んでいるのかもしれない」

オッタルにはベルとミノタウロスの話を聞かせてある。フレイヤ自身、直接その話をベルの口から聞いたわけでもなく、あくまでそれらしい話が耳に入っただけだ。

推測の域を出ないが、しかし彼があの猛牛のモンスターに惨敗さえ生温い体たらくを演じただろうことは、確信に近い。

フレイヤは折れたたんだ指をその細い顎に添えた。

「つまり、トラウマ……本当に子供達は繊細なのね。私達は執着することはあっても過去には縛られない。興味深いわ。……それとも、貴方達の方から見たら、私達は能天気なだけ？」

「滅相もあります」

「もう少し乗ってくると、私も退屈しないで済むのだけど……」

懇懇な態度を崩さないオッタルに「まあいいわ」と微笑し、再び彼を見る。

「それなら、あの子に取りついている茨を取り除くには、どうしたらいいのかしら？」

いっそ挑戦的に見える眼差しと笑みを向け、フレイヤは従者に問うた。

「因縁たる過去と決別するというのなら、己の手で過去たる象徴を打ち破る以外に、方法はありますまい」

オッタルもまた、主神の問いを真正面から受け止める。

「……さしもの貴方もそうだったの？」

「男はみな轍を踏む生き物だと、自分はそのように愚考します」

くすり、とフレイヤは笑って視線を引き払った。

憂慮の原因を一つ取り上げた彼女は、機嫌の良さを窺わせながら思考に耽る。

（ミノタウロスという原因があの子に影を落としているというのなら、答えは単純、何をするわけでもなく待てばいい。いつか今より成長したあの子なら、確実に乗り越えられる壁……）

時が経てばベルはミノタウロスを倒す実力を備えることになる。

尾を引いている過去から脱却できるということだ。何も問題はないだろう。

（そして、ミノタウロスを倒した暁には、あの子の輝きを阻むものは何もなくなくなる……）

そうなれば、やがてフレイヤの前に完熟して現れるだろう。きっと彼女の瞳が見惚れてしまうほどに。

待ち遠しい、と素直に思う。今のフレイヤにとってベルは関心の中心だ、何者よりも魅力的になっっている。

欲しいのだ、あの少年が。

ずっと手に届く位置に置いておきたいと思えるほどに。

そう考えたところで、フレイヤは、ふとオッタルに問いかけた。

「オッタル」

「何でしょうか？」

「貴方、何も思わないの？ 私はあの子に夢中になって、既にいる【ファミリア】の貴方達を放ってばかり」

表情を変えず黙っているオットタルに、フレイヤはなおも続ける。

「もしあの子が貴方より強くなったら、どうするのかしら？」

「……」

「私は貴方よりあの子を重宝するようになるかもしれないわ。貴方の今いるその場所を取り上げて、代わりにあの子をすぐ替えるかもしれない」

「フレイヤ様のお心のままに」

「妬かないの？」

オットタルは顔色を変えず真摯に、むしろ信頼さえ覗かせて言った。

「貴方の愛はみなに平等です。特別はあれ、優秀はない」

「……」

「私がこの場から姿を消したとしても、貴方の愛は消えないと確信しております」

銀の瞳と錆色の瞳が交差する。

無言が流れる中、オットタルはその巨体を折って静かに頭を下げた。

「出過ぎた言葉を」

「構わないわ。むしろ益々愛しく思えてきた、貴方のこと」

「光栄の極みでございます」

軽口を叩き合うかのように二人は言葉を交わした。

フレイヤはそれから少し意地悪そうに笑みを浮かべ、その美しい声を紡ぐ。

「でも残念ね。堅物の貴方が嫉妬する姿、少し見てみたかったのに」

「お望みとあらば」

「……ふ、うふふふっ！ あははははっ！ お願ひよつ、オットタル？ あまり笑わせないでちようだい？ 貴方が生真面目にやきもちを焼いているところなんて見たら、私、笑いを堪えられる自信がないわ」

「……」

心底可笑しそうにフレイヤは声を漏らして笑った。口もとに手の甲を当て、まるでいたいけな少女のようにお腹を抱えてみせる。

オットタルの方といえば、随時引き締まっている顔がこの時ばかりはほんの少し——恥じらうように——揺れた。頭部から生える猪耳がやや変な方向に曲がる。

一頻り笑ったフレイヤは目もとを拭う仕草をしてから、内心では羞恥を全開にしている配下の心情を察してやり、空気を入れ替えるように話をそれとなく変えた。

「ねえ、オットタルはどう思う？」

「……と言いますと?」

「あの子のこと。私の不安は杞憂に過ぎないかしら?」

先程までの自分の考えについて尋ねてみる。

オッタルはすぐに雰囲気を纏い直し、耳を傾けた。

「あの子はもう私が出さずとも強くなる。いずれは貴方の言う因縁も断ち切れるほどに」
「……」

「でも、本当にそれでいいのかと思う私もいるわ。言葉では上手く説明できないけれど……いずれ、その内、時間が経てば……そんな文句を並べていると、そうね、酷く小心のようにも思えてしまう。そんなことないのに、自分が墮落しているみたい」

考え過ぎかしら、と独白のように呟く。

何も問題ない、何も間違っていないベルの現状に、フレイヤはただ漠然と思ってしまう。本当にこのままでいいのかと。

はつきりとした根拠はない。ただ、多くの子供達……才能ある己の派閥の団員達を見守ってきた彼女は、時間の経過だけに全てを委ねてしまってもいいのかと思ってしまうのだ。

オッタルはこの時、初めてその瞳を細めた。

「オッタルも、この問題は時間が解決してくれると思う?」

「ええ、間違つてはいません。いずれはそうなるでしょう。しかし……」

オッタルは一度言葉を切り、絶対の確信とともに口を開く。

「冒険しない者が殻を破れぬのも、また真理でしょう」

言い切った。

己の持論を。

ここにはいない、とあるハーフエルフの少女と対極の論を。

いくども命を賭し現在の自分を築き上げた生粋の武人は、冒険しない者に高みへは至れないと、はつきり言い切った。

それはフレイヤさえ見通すことのできない少年の『未知』を引き出す可能性も示唆している。そう。

フレイヤは見通せず、オッタルだけが見込んだ、少年の可能性。

「……今度のあの子への働きかけ、貴方に任せるわ、オッタル」

美の女神は葡萄酒の香るグラスを手放した。

両目を閉じ、どこか投げやりに椅子の背もたれへ寄りかかる。

オッタルはこの時ばかりは訝しげな顔を隠そうとしなかった。

「……どのような風の吹き回しですか?」

「だって、私より貴方が今のあの子のこと、わかっているんだもの」

うつむいて、少し拗ねたように言葉をこぼした後。

顔を上げたフレイヤは、瞳を細めて妖麗ようれいに笑った。
「嫉妬しちゃうくらいに」



太陽が空の正中に差しかかるうとしている。
摩天楼施設から北に進んだメインストリート。

冒険者より市民の姿が目立つこの大通りに、オーブンカフェが面していた。からっとした日差しのもと多くの客が談笑を交わしている。

多くの日傘が開き日除けを作る中、ベルとリリは二人で白いテーブルを挟んでいた。

「じゃあ、『ソーマ・ファミリア』の方はもういいの？」

「はい。リリはじきに亡くなったことにされるでしょうから」

ベルとリリがあらためてパーティを結成して一日。

リリを今取り巻いている状況の確認のため、ベルは彼女から説明を受けている。

「死人という扱いになれば『ソーマ・ファミリア』に関わる必要はないですし、あちらからも付け狙われることはないでしょう。何せ、もういないことになっているのですから」

なのでベル様にご迷惑はかけません、とリリは笑って言った。

変装時の前髪がなくなったことであらわになっている、その円らな瞳と愛くるしい顔立ちを視界に収めながら、ベルは若干眉を曇らす。

「僕のことはどうでもいいんだけど……その、死人だなんて、リリはいいの？」

「お心づかいありがとうございます、ベル様。ですが割り切った方がいいかと。リリには身寄りはいませんし……ベル様がリリのことをご存じであるなら、リリはそれだけで満足です」

本心からそう言っているリリに、ベルもこれ以上触れるのは止めた。

彼女の傷口を広げるような真似になると思い、無理矢理自分の中で完結させる。

「リリがそう言うなら良かったよ。でも、『ソーマ・ファミリア』の人達にバレないかな？リリが生きているってこと」

「絶対とは言い切れませんが、今のリリに繋がりそうな足跡はこの二日で消しておきました。そこまで心配することはないと思います。……それに、リリにはこれもありますし」

ぺたり、とリリは自分の頭を撫でる。本来の栗色ではないダークブラウンの髪がざらりと揺れ、またそのすぐ近くで猫の獣耳がびくびくと動く。瞳も輝くような黄金色だ。

【シンダー・エラ】。

リリの十八番の変身魔法により、今の彼女の外見はどこからどう見ても獣人の子供だった。顔立ちだけはそのままであるが、間違っても小人族には見えない。

この能力を知らない限り、他者が『リリルカ・アーデ』に辿り着ける可能性は万が一にもないと言える。ベル自身、この魔法の存在を打ち明けられた時はそれは驚いたものだ。

「えーっと、それじゃあ……」

「はい、問題はありません。あったとしても、ベル様の手を煩わせることはさせませんから」それはもういいよ、とベルは苦笑しながら、ひとまず安堵を覚えた。

これでリリが危険な揉めごと巻き込まれることもないだろうと。もしそうであっても、今度

は力になってやれる筈だと。

正直なところ、リリが死にかけたことの顛末を聞いて怒りと悔しさも感じている。人を人と思わない暴挙に対する怒りと、そんな彼等に仕返しができないという悔しさだ。

だが、リリのことを思えば【ソーマ・ファミリア】には関わるべきではない。こと限って、現状での報復は自ら危険を呼びにいく行為だ。

リリが無事ならそれでいい。ベルは厄介な感情を振り払ってそう結論付ける。

もう溝は埋まった。

全てではないかもしれないが、ぼつかりと隔たっていた自分達の距離は確かに縮まった。互いに手を繋げられるほどに。

ここから再出発だと、ベルは笑みを滲ませた。

「……ベル様」

「ん、なに？」

「ベル様は、本当にこのままでいいんですか？」

「え？」

「リリをこのまま許してしまっているんですか？」

ところが、ベルとは真逆にリリは表情を暗くさせる。

ややもすれば絶るような目でベルを見つめてきた。

「リリはベル様を騙していたんですよ？　ベル様の厚意につけ込んで、あまつさえ裏切ったんですよ？」

「……」

「しかも、くすねてきたお金も返せません。このまま許されてしまったら、リリは……」
リリとの関係が未だすつかりもと通りとわからないのは、これが原因だった。

自責だ。罪悪感だ。贖罪の渴望だ。

犯した自分の行為にリリは苛まれている。もう何度謝罪されたかベルはわからない。

先日的一件でリリは全財産を失っている。換金していた手持ちのお金とアイテム類、貯金と言えたノームの宝石も【ファミリア】の仲間に奪われてしまったからだ。返すものがないという負い目は、彼女の心に一層の自己嫌悪の念を落としていたようだった。

大丈夫だから、と繰り返して言ってもリリの顔は優れることはなく、むしろそう言う度に落ち込んでいく風にも見える。いっそ彼女は文字通りの手痛い罰を望んでいるのかもしれない。

こういうのは求めてなんかないんだけどなあ……、とベルは参ったように頭をかいた。

とにかく、苦手なのだ。

折檻などは勿論、このような人の上から偉そうにものを言ったり、論じたりするのは。今までがごとごとく、されてきた側だっただけに。

顔をうつむけるリリを見ながら、何とか彼女の罪悪感を取り払おうと、ベルが必死に上手い

解決法を探していると……そこへ、援軍がやって来た。

「おーい、ベル君！」

「あつ、神様！」

自分と呼ぶ幼い声に立ち上がると、案の定、ヘステシアがカフェに姿を現していた。

リリとそこまで変わらない小さな体が、賑わう客の群れを縫^ぬってベル達の前に到着する。

「お待たせ。すまない、待ったかい？」

「そんなことないです。それよりもすいません、バイトに都合をつけてもらって……」

「ボクの方は平気さ。それより……彼女がそうかい？」

「あ、はい。この子が前に話した……」

「リ、リリルカ・アーデです。は、初めましてっ」

向けられる視線にリリは慌^{あわ}てて椅子を降りて一礼する。

ヘステシアがこの場に同席することになったのは、彼女自身が言い出したことだった。

彼女の真意は明らかだ。つまり、自分の【ファミリア】の団員に関わるサポーターをこの目で確かめようというのだ。

女神の眼鏡にかなわなければ、リリはベルとのバーティ解消もありうるかもしれない。それを事前から察しているリリは、緊張した面持ち^{おもも}でヘステシアと向かい合う。

だがそこで、ベルは思い出したように「あつ」と呟^{つぶや}きをこぼした。

「いけない。神様の椅子を用意してもらってないや……」

「……！ なあにつ、気にすることはないさ！ この客の数だ、代わりの椅子もないだろう！

よし、ベル君座るんだっ、ボクは君の膝^{ひざ}の上に座らせてもらうよ！」

「あはは、神様もそんな冗談を言うんですね。ちよっと待っていてください、店の人に頼んできますから」

笑いながらベルは去っていった。謀^{はかりごと}を知らない純粋な子供の笑みだった。

置いてかれたヘステシアはしばし動きを止めていたかと思うと、へにゅん、とツインテールがしおれる。

哀愁^{あいしゅう}を漂^{ただよ}わせるその後ろ姿に、リリは戸惑^{とまど}いを隠せない。

「……ちよ、ちよどいい。ベル君には最初から席を外してもらう予定だったんだ、何も問題はないさっ」

「は、はあ」

少し強張^{こわば}った頬^ほを赤らめながら、ヘステシアはびよんとベルの座っていた席に腰かける。リリもそれに倣^{なら}った。

「じゃあ、早速付き合ってもらうよ。あの子もすぐ帰ってくるだろうしね。自己紹介なんかはいいだろう？ 君もベル君からボクのことは聞いているだろうし」

「は、はい」

話の主導権を真^まつ先に握^さられていたことにリリが気付いたのは、もう少し後のことだった。小人族^{バルム}であり年幼く見えるリリと比べても、ヘスティアのあどけなさは遜色^{そんしよく}ない。本当に少女と幼女の境を揺れ動いている。

だが、かえってそのアンバランスさが、整い過ぎた容貌^{ようぼう}の美しさに拍車をかけていた。

いじらしくもあり、凛々^{りんり}しくもある。あたかも矛盾した二つの美を内包させ両立させてしまったような。

日傘^{パラソル}を掠^{かす}めて届いてくる日の光を浴びて、漆黒^{しつこく}の髪が艶^{つや}を帯びていた。

「率直に聞くよ。サポーター君、君はまだ打算を働かせているかい？」

「――っ」

言葉違わず真^まつ直^すぐ切り出された問いに、リリは動揺した。

ヘスティアは表情も瞳の色も変えず自然体のままだ。しかしそこには彼女を神たらしめる威厳^{いげん}が確かにある。

リリは試されていることを知った。見極められていると。

名前を呼んでももらえていないのが何よりの証拠だった。ベルにしてきたことを考えれば当然の成り行きでもある、まず信用に足る小人族^{バルム}ではないのだから。

だからリリは、嘘偽^{うそいつわ}りなく己をぶつけることにした。

「ありません。リリはベル様に助けられました。もう、あの人を裏切る真似なんかしたくな

い」

視線が混じり合う。どちらも逸^そらそうとしない。周囲の喧騒^{けんそう}が遠い場所に離れていく。

神の前では嘘はつけない。

どこかで聞いたことのあるその言葉が真実だということを、リリは全てを見透かしているような女神の瞳の前にして悟った。

彼女達はその気になれば、下界の者の嘘は全て看破^{かんぱ}されるのだろう。

「……うん、わかった。君のその言葉は、まず信じよう」

リリにとって長い時間が終わりを告げた。

肺に溜^ためた空気を一気に解放するのを堪^{こら}えながら、ゆつくりと肩の力を抜いていく。

「サポーター君、ボクはベル君のことを大事に思っている。あの子なら目に入れても痛くないと豪語できるほどにね。ボクの初めての眷属^{かみぐ}だ、失いたくないというのが心からの本音だよ」

ヘスティアは一呼吸を置いて、なおも発言を続けた。

不意を打たれつつ、リリはすぐに聞く姿勢を作る。

「ベル君に話を聞いて、君の境遇は概ね把握^{おぼ}しているつもりだ。何故^{なぜ}泥棒まがいのことをやっているのかも含めてね」

「……」

「君に安い同情をするつもりはないし、それは無駄だと思ってる。だから過ぎたことに何も言

うつもりはない。……ただ」

本題だ、と言うようにヘスティアは言葉を溜めた。

双眸からリリ以外のものを全て取り除いて、言う。

「もし同じことを繰り返して、あまつさえあの子を危険に晒したら……ボクは君のことをただじゃおかかないからな」

——リリは体を硬直させた。

呼吸の仕方が一瞬わからなくなる。

忘れていた。目の前の少女は、自分達の身近にいる彼等彼女達は、人知を越えた『神』という存在であるということ。

リリはおろか、この都市を一瞬で灰塵に帰す力を持った超越存在だということを、当たり前過ぎて忘れていた。

青みのかかった瞳に射竦められ、心臓を鷲掴みにされる中、それでもぶれることのない想いを支えにして、リリは前を見据えながら口を開いた。

「……誓います。もう二度とあのようなことはしないと。ベル様にも、ヘスティア様にも……何より、リリ自身に」

何も知らない街の活気が賑やかに流れていく。

無言を交わし合っていた二人の時間は、ヘスティアが瞑目することで終わりを告げた。

「はちばちと瞬きをした彼女は「わかったよ」というように視線を飛ばし、リリの方はもう我慢できず脱力する。テーブルの上に突っ伏しそうになった。

彼女に釘を刺したヘスティアはそれから、その豊満な胸の前で腕を組み押し黙った。何故か急激にむつりしだしている。自分にはないものを見せつけられうぐつと詰まりながら、リリは居心地の悪い空間に体を小さくさせた。

「……サポーター君、正直に言うよ」

「は、はいっ」

「ボクは君のことが嫌いだ。ベル君に付き纏ってほしくないと思ってる」

「！」

リリが目を見開く間にも彼女は声を連ねた。

「当たり前だろう。話を聞いた時から君に対するボクの心証は最悪さ。ベル君の人の良さに付くことで好き放題たぶらかして、あまつさえ手の平を返したように今では取り入ろうとして。何が目的だ、この泥棒猫めっ」

【シンダー・エラ】によって生えている獣耳がビクリと揺れる。

言い得て妙だとも思ったが、少し違うような、とリリは汗を流しながら思った。

「大体さっきから何だい？ 会った時からずつとしょぼくれたような顔をして。見ているこっちがほんとと憂鬱になってくるよ」

まるでお前の顔を見ていると飯が不味^{まず}くなるというような言われようだった。

目を尖^{とが}らせたヘステシアの言葉は止まらない。

「大方、ベル君のことを考えていたんだろう？」

「っ！」

「何故わかったかって？ ふんっ、いつも鏡の前で類^{るい}は違えど似たような顔を見ているからさっ。あー、やっぱり嫌だっ、君をベル君の側になんか置きたくないっ！」

ついにはえも言われぬ波動がヘステシアの背中から立ち昇^{のぼ}り始めた。

ぎょっと目を剥^むいた周囲の客が途端に距離を取り始める中、リリは半泣きしそうになる。

「優しいベル君に助けられて、心を入れ替えたなんて言っている君のことだ、どうせ今度はあの子が優し過ぎて、困り果てているんじゃないかい？」

「!?」

「あの子が君に何もしようとしないから、君は罪悪感に潰^{つぶ}れそうなんだ。ボクから言わせればそれはただの甘えだね。本当に嫌な奴だ、君は」

とうとうヘステシアは言葉にも陰を乗せ始めた。

じろつとやや目を据^すわらせながら、ぐうの音も出ない小さな小人族^{ベル・ム}を見つめる。

「それなら、いいだろう、ボクがベル君の代わりに君を裁^{さだ}めてやる。言っておくけど拒否権なんてないぜ。疑似『神の審判』だ、光栄に思うといいさ」

ふんつと鼻を鳴らしヘステシアはふんぞり返る。

怯^{ひる}みっぱなしのリリはかろうじて頷^{うなず}くことしかできなかった。いやむしろ、ベルの主神である彼女に言い渡されるなら、という気持ちもあったのかもしれない。

リリは落ち着きなく次の瞬間を待った。

ヘステシアの方はというと、ぐざぎつと歯をあらん限りに噛^かみ締めながら、どこか苦心するようにして……やがてその言葉を吐息とともに落とした。

「ベル君の、面倒を見てやってくれ」

「……えっ？」

思い切り「ぶすっ」としながらヘステシアは続ける。

「言っとくけど、君のためなんかじゃないんだからな。ボクは今回の話をあの子の口から聞いて、つくづく彼のことを心配になったんだ。というか、確信した。……いつか騙される、と」

「……」

「だから君に頼むんだ。変なやつに引つかからないように目を光らせてくれ。お目付役さ」リリは今度こそ驚いた。思考がまとまらないまま何か言い返そうとしたが、かなわない。目の前の瞳が口応えを許さなかったからだ。

「そもそも、断罪なんて生意気なこと言ってるんじゃないよ。いまだき神だつてそんなことしないぜ？ 罪悪感なんて、結局自分が自分のことを許せるか許せないかでしかないんだ」

それをベルに求めるな、とヘスティアは語気を強くする。

「あの子に後ろめたいことがあるなら、満足するまで恩を返せばいい。当たり前だろう。それが誠意だ、けじめだ。君が心を入れ替えたというのなら、行動で証明してみせろ」

一氣に浴びせられた言葉はそこで終わった。

辛辣にも聞こえる女神の神意に、リリは頭を垂れる。

神ヘスティアはリリにチャンスを与えているのだ。いつそ慈悲深いまでに。

彼女は寛大だ。同時に神格者だ。

先程までの非難は彼女の偽りのない本音だろう。それでいてなお、リリにベルのもとへいることを許している。

いかなる者でも慈心を恵む、嘆願の庇護者。

その温情に感謝しながら、己のことを見つめるヘスティアに、リリは黙って一礼した。

彼女達の間で、森の泉に浮かぶような静寂が流れる。

「ごめんなさーいつ、遅くなりましたあー!」

「……パーティの加入は許可する。あの子のお守も任せた。けどっ、くれぐれもっ、出過ぎた真似はしないようにッ」

「はっ?」

静寂を破ったヘスティアの重苦しい警告に、リリは目を丸くした。

真意を尋ねる前にベルが椅子を持ってテーブルへ戻ってくる。頼りに謝ろうとする彼の言葉をみなまで言わず、ヘスティアは、その腕を取って自分のもとに引き寄せた。

「――なっ」

「神様……?」

「さてあらためて……初めまして、サポーター君。ボク、のベル君が世話になっていたようだね」

『ボクの』を強調させてのたまうヘスティア。纏う雰囲気はがらりと一変しており、まるで縄張りを守る虎のごときだ。手を出したら食うぞ、と視線が物語っていた。

リリはぎょっとして、そのヘスティアの牽制に頬を引きつらせる。

彼女は神だ。寛大で神格者で、崇めるに相応しい気高い存在だ。

しかしそれ以上に、子供だ。

というか――敵だ。

わざわざベルの腕を自分のものに絡ませ、わざわざベルの前で仕切り直してくるその意趣返しに、リリは頭の裏側あたりに怒りの筋を立てた。

忠誠に近い感情を彼女へ捧げたリリだが、こればかりは話は別。

ぱしっ! とベルの反対の手を両手で握って引き寄せる。

射殺さんばかりに鋭くなったヘスティアの視線を、リリは真っ向から迎え撃った。

「いえいえこちらこそ。リリにはお優しい、ベル様には、いつも良くしてもらっていますから」
「……ッ！」

かたや少女、かたや少女。

いじらしく可愛い幼子^{かわい、ちやうど}の外見でありながら、二人は女の顔をして睨み合う。

座っている椅子から地面に足もつかない彼女達は、バチバチと火花を散らし合った。

（かつ、神様あああああああ!?!）

腕に押しつけられた双丘^{ふたむね}もとい非常事態によって、ベルは今自分の眼前で何が起きているのかもわからない。パニックの極みだ。

小さい彼女達の前哨戦は、ひとまず神が先制を奪うのだった。

「くっ、さすが神様……!」 その胸だけは伊達^{だて}ではないということですね……!」

「何が言いたいのかな、サポーター君……?」

「えっと、リリ。それで、これからのことなんだけど……」

一悶着^{ひとちやうど}の後、ベルが口を切った。

落ち着きを取り戻したそれぞれが椅子に腰を下ろす中、今は黄金色^{こがね}に染まっているリリの瞳が、不思議そうに彼の方を見る。

「リリは今、ホーム……寝泊まりする家がないんだよね?」



「はい。以前からそうでしたが、料金の安い宿を転々としています」

恥ずかしそうに笑うリリを尻目に、ベルはこつそりとヘステシアに目配せする。彼女はぶすうとしながらもしつかりと頷いた。

「リリ、もしよかったら……僕達のホームに來ない？」

「……え？」

「というか、『ヘステシア・ファミリア』に入らないかな？ まだ神様と僕しかいないけど」リリが既に【ソーマ・ファミリア】でやっていけないだろうことは、ベルにだってわかる。ならないっぞ、と思ったのだ。彼女を独りにさせるくらいなら自分達のホームに迎えたいとむしろベル自身の希望でもある。

リリを見定めたヘステシアから目立った反対もなく、後はリリ自身が頷くのを残すのみだ。

「……ヘステシア様、よろしいんですか？ ヘステシア様はリリのことを……」

「ふ、ふんっ……勘違いしないでくれよ？ いくら嫌いなやつでも、身寄りのない子供を放っておくのはボクの存在意義に関わるんだ。再就職先が見つかるまで、少し面倒を見てやろうと思っただけさっ」

頬を染めて顔を背ける主神の素直ではないその姿に、ベルは苦笑する。

リリはその光景にクスリと穏やかな笑みを漏らした後、ゆつくりと、顔を横に振った。

「ありがとうございます、ベル様、ヘステシア様。そのお気持ちだけでリリは十分です」

「え……ど、どうして!？」

「これ以上お二人の優しさに溺れることが心苦しいのと……リリはまだ、『ソーマ・ファミリア』の一員ですから」

嘸然とするベルにリリは淡く笑いかけながら、肩の上からそつと背中に手を伸ばす。

彼女の背に刻まれているだろう【ステイタス】の存在に、ヘステシアも眉をひそめた。

「まだ【ソーマ・ファミリア】の構成員であるリリは、ベル様達のホームへは行けません。もしリリがベル様達のホームに通っていることがバレてしまえば、いらぬ火の粉が確実にお二人に及びます。そんなことになってしまったら、リリは耐えられません」

「ほ、僕は別にそんなことっ……あ」

食いがろうとするベルだったが、何かを思い出したように止まる。

ことは彼一人の問題ではない。そこには巻き込んでしまう家族が確かにいる。

ベルは沈痛そうに瞼を重くしながら、何かを考え込んでいるヘステシアの方を見た。

「サポーター君、『ソーマ・ファミリア』脱退の条件は、いや脱退自体は禁止されているのかい？ 君の主神は何て言っているんだ？」

「ソーマ様はこれと明言しているわけではないのですが……恐らく、大量のお金が必要になってくると思います」

「金か……」

人員に次いで、資金は「ヘステシア・ファミリア」に圧倒的に不足しているものの一つだ。ベルの著しいダンジョン進捗状況しんちよくもあって、約一月前に比べれば遥かに潤沢じゅうたくになっているが、やはりそれも生半可に過ぎる。せいぜい十万ヴァリスそこそこが支払い能力の限界だ。それにもしヘステシア達が脱退金を立て替えることができたとしても、リリは決して受け取らないだろう。

「あの、【ファミリア】から抜けることって、そんなに難しいんですか……？ 僕の知人の方に、【ファミリア】から脱退している人がいますけど……」

「その主神次第だね。団員の申し出を受け入れてくれる神もいれば、取り合わない神もいる」
 【ファミリア】の脱退は、抜ける側の当人だけではなく、抜けられる側の【ファミリア】側にも危険性が付き纏う。情報漏洩ろうじつはその最たる例だ。

どんなに放縦な神でも派閥の最低限の管理だけはデリケートに行っているものなので、大概の場合、神達は構成員の脱退を嫌っていた。

「君のその知り合いも、案外、人には言えない事情いじけいっていうものを、抱えているのかもしれないよ」

リリのことを一度見やっってからそのように告げてくるヘステシアに、ベルも彼女の言わんとしていることがわかった。

リリと同じ派閥に所属しつつ離脱——つまり脱走状態のらねこ。野良猫ならぬ、野良の冒険者だ。

神の許しを受けていると言う「豊穡ほうじくの女主人」の女将ミアはともかく、シルがわけありだと口を濁していた酒場の店員達は、まさにそれが当てはまるのかも知れない。

聞かずとも、その境遇の立場の者達が生きにくくなるだろうことは、察しがついた。

「……自分の意思で【ファミリア】に入った人じゃなくても、許してもらえないんですか？」

「貴族の子は貴族、農民の子は農民。つまりはそういうことです、ベル様」

構成員の間で子がなされれば、その子供が【ファミリア】に入団するのは義務だ。

主神にしてみれば、己の分身を作った時点でそれは当時者達の責任、自分は望んでいなかったと子供が騒ぎ出しても関与するところではない。

突き放した言い方をしてしまえば、神の知ったことではないのだ。

脱退の許可は、結局、主神の度量次第。善良な神に恵まれるか否か。

運がなければ、ある神には大金を請求され、ある神には無理難題を課せられニヤニヤと成り行きを見守られる。

ベルは複雑そうな顔で、笑っているリリを見つめた。

「ソーマの協力が得られないのなら、『恩恵』の引き継ぎもできない……改宗コンバージョンも無理か」

「そうなりますね……」

「けど、君もこのままでいるつもりはないんだろう？ いつか打診しにでも行くつもりかい？」

「はい。今はまだ無理だと思いますけど、折を見てソーマ様のもとへ足を運ぼうと思います」

いい返事が聞けるかどうかはわかりませんが……」

それきり話が一時途切れた。それぞれが思い詰めたような顔を浮かべる。

うららかな陽光が少々無神経に照る中、ベルは顔を上げてリリに向かって尋ねる。

「じゃありり、これからどうするの？ また他の宿に、一人で……？」

「実は顔馴染みのお店……まあ、リリにとっては正確には違うんですけど、ともかく、気を許せるノームのお爺さんじいさんがいるので、そこではらくお世話になろうかと思っています。あ、勿論働きますよ？ なるべく変身も使わないで、ちゃんと認めてもらえるように努力します」

影もなく明るく答えるリリの言葉に、あてがあるとわかったベルはひとまず安心した。

（今度、エイナさんとも話した方がいいよね……）

情けない話だが、【ソーマ・ファミリア】の問題はエイナの手を借りないことには何も状況が進みそうにない。

本来、ギルドもよほど大きな案件でなければ【ファミリア】の問題に対して干渉しない。

彼等はオラリオの管理者であって、冒険者やサポーターのための慈善組織ではないのだ。

ギルドが冒険者を援助するのは、あくまでダンジョンから生まれる利益を効率良く回収するために過ぎず、冒険者やサポーターの個人間のトラブルはまず受け合うことはないのである。

エイナの人の良さよさと厚情こうじょうに甘えてしまっていると、ベルはこめかみを片手で押さえた。

「おいおい、そんな押しかける真似して平気なのかい？ 何だったら、ボクのバイト先を紹介

してあげようか？」

「いえいえ。リリは魔石点火装置まひのちもとの扱いを間違えて、バイト先の露店ごと大爆発させる真似だけは御免なので、丁重にお断りさせていただきます」

「なぜそれを知っているッ!？」

「つい先程周囲の喧騒から拾ったのですが、ロリ神の祟りたたこと、北通りの天災の噂うわさはこの界限かいがいでも有名なのだとか……」

「うわああああああああっ!? ベル君の前でバラすなあああああああああっ!」

「むぐぐぐうっ!？」

でもまあ、ともベルは思う。

目の前でふざけ合っている女の子のためなら、この白い頭で良ければ、いくらでも下げよう。

ベルはようやく本当の笑みを咲かせているリリを見守りながら、自らも相好そうこうを崩した。



北西のメインストリート、『冒険者通り』を走って進んでいく。

僕は神様達と一旦別れ、ギルド本部を目指していた。先程まで話していた【ソーマ・ファミ

リア」のことにについて、報告だけでもエイナさんにしようと思ったからだ。既に開店の時間を迎え、通りの両端を埋める店々は今日も賑わいを見せている。

冒険者の行き来が激しいこの大通りに店を構えるだけあって、ぱっと目に付く商店は立派な構造をした建物が多い。出入り口をお洒落に飾った煉瓦造りの装身具店や、頑丈そうな灰色の加工石で築かれた道具屋などなど。陳列窓の奥に並べられる商品だって、どれも総じて品質が高そうなものばかり。

周囲では、本日の冒険者業は休業なのか、武器を脱装した身軽な私服姿の亜人達^{サベリマン}の姿が多く見受けられ、通りの店々を見て回っていた。パーティと思しき少人数の集団はそれぞれが固まって移動し、何かの話題に花を咲かせながら笑みを交わし合っている。

ああいうのいいなあ、なんて、気の知れた仲間内で迷宮探索の買いものを楽しむ光景を、ちよつぱり羨ましく思ってしまった。

やがて広い大通りに現れる大神殿、いや万神殿^{バンデオン}。

前庭を通って白柱で造られたそのギルド本部へと足を踏み入れる。

正午を過ぎた中途半端な時間帯もあって——多くの冒険者達が迷宮探索へ繰り出している頃なので——白大理石の広いロビーには空間が目立つ。本来混み合うほどの同業者達はほとんどおらず、僕はすぐにエイナさんを見つけることができた。

「……？」

受付窓口にいるエイナさんには、先客がいた。

白い布に包まれた荷物を持って、カウンターを挟み何かを相談している、一人の冒険者^{あひづる}。相槌を打ちながら何かを真剣に考え込んでいるエイナさんの表情ばかりに目がいつて、僕はこちらに背を向けているその人に注意を向けず、首を傾げるくらいで足を進めていった。その長い金の髪に、軽い既視感を覚えながら。

やがて間近まで迫ると、エイナさんが僕の存在に気付く。緑玉色^{エメラルド}の瞳がはっと見開かれた。そして、その反応を追うように。

こちらへ背を向けていた人物が、ゆっくりと振り返る。

「——え」

金の長髪が揺れ、その奥から、澄み切った金の瞳が現れた。

ほっそりとした顎、ほっそりとした首筋。瑞々^{みずみず}しい白い肌は色香なんていうものとは一切無縁で、ただただ綺麗^{きれい}だった。

女神様にも劣らないその美しい相貌は、突然現れた僕に、軽い驚きをあらわにしている。

アイズ……ヴァレン、シユタインさん。

声を出すことを忘れた僕達は、三者三様の体勢で、その場で動きを止めてしまった。

「……」

「……」

「……」

主に僕とヴァレンシユタインさんが視線を絡め、エイナさんはこちらの顔を交互に見る。呼吸ができていなかった。その金の双眸に見つめられ、頭が真っ白になる。長い沈黙が続く中。

僕は表情を変えず、ゆつくりと、自分の体に回れ右を命じ、彼女達に背を見せる。え、と誰かの呟きがこぼれたその直後、出口へ向かって、全力疾走を開始した。

「べ、ベル君!? 待ちなさい!」

エイナさんの制止の声も聞かず、走る走る走る。

白大理石の床を蹴り抜き腕を大きく振りながら、本部の玄関口を一目散にくぐり抜けた。

——何で、どうして、エイナさんに、あの人が!?

——一体何が起こってるの!?

恐ろしい勢いで首と顔、そして耳を真っ赤に染めながら、僕は本能に促されるまま加速する。混乱が極致に達する中、前庭のド真ん中を突っ切り、この場からの離脱を試みた。

けれど次の瞬間、すぐ隣で、神速の風が走る。

僕を追い抜き、そして僕の進路に立ちはだかる形で、金の髪を翻すあの人が眼前に現れた。

「——いつ!」

目を限界まで見張り、ブレーキなんてかけられないまま、僕は彼女へと突っ込んだ。

「ベル君っ、ヴァレンシユタイン氏!」

エイナさんの駆け寄ってくる足音を耳にしながら、瞼を強く閉じていると……何も痛みがないことに気付く。

はっとしながら目を開けると、僕のお腹と背中には細い腕が回され、横に抱えられるように体が支えられていた。

呆然としながら顔を上げると、あの人が、少し眉を下げがちに僕のことを見下ろしている。

「……ごめんね、大丈夫?」

「っっ——す、すいませんっ!」

顔を一層赤くさせながら、飛び跳ねるように彼女から離れる。

突撃と言って差し支えのなかったあの勢いを完全に殺され、僕は、抱きとめられたらしい。心臓をばくばくと震わす一方、無茶苦茶とも言える一連の流れに愕然としてしまう。

「何やってるの、キミは! いきなり走り去るなんて失礼でしょ!」

「す、すいません、エイナさん……」

目の前で叱りつけてくるエイナさんへ反射的に謝りつつ、視線をヴァレンシユタインさんに釘付けにする。

彼女と目が合った瞬間慌てて顔を背け、僕は、どもりながらエイナさんへ質問を投じた。

「そ、それで、こ、これは、一体どういう状況で……!」

「はあ……ヴァレンシュタイン氏が、ベル君に用があるそうなの」
「えっ!？」

何が無だかわからないでいる僕に溜息をつきながら、エイナさんはそれだけを教えてくれた。反射的に振り向くと、ヴァレンシュタインさんは手にしていた荷物の布を解く。

出てきたのは、緑玉色のプロテクター。

僕は大きく目を見開く。

「ダンジョンでこれを拾って、キミに直接返したいからって。ヴァレンシュタイン氏は私に相談しに来てくれてたんだよ?」

エイナさんがあらましを語ってくれる横で、僕は再び呆然としていた。

このプロテクターは三日前、度重なるモンスターの襲撃で10階層に落としてしまったものだ。当時はリリのもとに駆け付けようと躍起になっていて、回収することがとうとうできなかったんだけど……。

そして同時に気付いた。あの時、モンスターに群がられていた僕を手助けするように庇ってくれたのは、きっと、この人だったのだ。

「……ベル君、後は二人で話をつけるんだよ」

「へっ!？」

耳もとで告げられた言葉に、勢いよくエイナさんの方を向く。

囁き声で叫ぶという器用な真似をしながら、僕は彼女に訴えた。

「ま、待ってくださいエイナさん!? お願いですからっ、お願いですからまだここにいてくださいっ……! 僕、死んじゃいます……っ!？」

「何言ってるの、男の子でしょうっ。言わなきゃいけないことが沢山あるんだから、しっかり一人で伝えるっ。いい?」

頑張るんだよ、と顔をぐつと寄せてエイナさんは小さな声で言った。

恐らくは氣を利かせて二人きりにしようとしてくれる彼女の配慮に、僕は半泣きしそふになる。ギルド本部へ戻っていくその後姿を、置いてかれた小動物の氣持ちで見送った。

「……あの、これ」

「!」

声をかけられ、振り向き、差し出されたプロテクターを咄嗟に受け取る。

僕と身長が同じか、少し低いヴァレンシュタインさんはこちらをじっと見つめていた。

僕の全身は赤い石像と化し、一向に口が開かない。

「ごめんなさい」

「え……?」

「私が倒し損ねたミノタウロスのせいで、君に迷惑をかけて、いっぱい傷付けたから……ずっと謝りたかった。ごめんなさい」

目を伏せがちにして頭を下げる彼女の姿に、僕は息を呑み、それまでの状態をかなぐり捨てて声を張った。

「ち、違います！ 悪いのは迂闊に下層へもぐった僕でっ、ヴァレンシュタインさんは、貴方は全然悪くなくて!? むしろ助けてもらった命の恩人で！ というか謝らないといけないのはおれを言わずに散々逃げ回っていた僕の方でっ……ご、ごめんなさいっ！」

動揺に動転を重ね、とにかく言わなければいけないことを片っ端から口にする。

今の今までうろたえるだけで、この人に謝らせてしまったことを死にたいくらいに恥じた。

「その、えっと、だからっ……」

顔全体を熱くさせる僕は、本当に伝えなきゃいけないその言葉を必死にたぐり寄せ、ようやく、ようやく自分の声に乗せた。

「何度も助けていただいて……本当に、ありがとうございます！」

勢いよく頭を下げて、腰を折る。

震える瞳が足もとの石畳を映す中、額から流れ出る汗が鼻を伝い、落ちる。

大通りの喧騒がずっと遠くに聞こえ、鼓動の音だけが大きく鳴り響いていた。

そのまま固まること数十秒。

ややあつて、僕が何とか体勢をもとに戻すと。

軽く瞠目していたヴァレンシュタインさんは、確かに、小さく微笑んだ。

「~~~~~っ！」

かあああつ、と音を鳴らしながら、僕は真つ赤に染まった。

彼女の笑みから逃れるようにうつむき、前髪で目もとを隠す。

胸の中に負けないくらい、背中が熱くて堪らなかった。

「……」

「……」

会話が途絶える。

僕もヴァレンシュタインさんも口を開くことができず、時間だけが流れていく。

こんな時に限って冒険者はおろか、人つ子一人この場には通りかからない。ギルド本部の広い前庭の中心で、僕達は沈黙を抱え、立ちつくすことしかできなかった。

「……ダンジョン探索、頑張ってるんだね？」

「は、はいっ!?」

投げかけられた声に、顔を振り上げる。

ヴァレンシュタインさんは感情が希薄な表情で、言葉を続けた。

「もう、10階層に辿り着いたみたいだったから……すごいね」

「い、いえっ、それは色んな人に協力してもらったおかげでっ、ば、僕は全然まだまだというか!? も、目標にも全く手が届かなくて……!」

いきなり憧れの^{あこが}の人に褒め言葉を頂き、引き続いてパニック状態に陥る。^{おちい}
僕は目をぐるぐると回しながら両手をぶんぶん振った。

「戦い方だって、我流というか素人というか、変なことをしてモンスターにやられそうになることだってよくあって、もつと強くななくちゃいけないのに、とにかく全然ダメでっ、全然なっちゃいけないくてっ、えーと……!？」

歯止めを見失ったちぐはぐな言葉が口から流れ出ていく。謙遜^{けんそん}したいのか卑下^{ひげ}したいのか、一体どっちなんだ僕は。

「……」

平常心を放り投げたそんな僕に、ヴァレンシユタインさんはじつと視線をそそいできた。やがて何か考え込むように顎^{あご}を軽く引く。

取り乱していた僕は、その彼女の様子に後から気付き、未だ顔を熱^ねっぽくした状態でおおずと尋ねた。

「あ、あの……ど、どうかしたんですか？」

黙りこくっていたヴァレンシユタインさんはちらと僕を見て、逡巡^{しゆんそん}するような素振りをした後、更に数秒後。

彼女もまたおずおずと、次の言葉を切り出した。

「それじゃあ……私が教えてあげようか？」

「……えっ？」

「……戦い方。教えてくれる人がいない、んだよね？」

言われたことの意味を理解するまで、かなりの時間がかかった。

僕は目を大きく開きながら、思わず錯乱^{さくらん}しそうになる。

「な、なんで、ど、どうしてそんなことを……!？」

「……強く、なりたそうだから、かな。私もその気持ち、わかるから」

後はお託^{たく}びに、と途切れがちに話すヴァレンシユタインさん。

そんな彼女と打って変わって、僕は冷静でなんかいられない。

この人に、戦い方を教わる？ 迫^{せま}いつきたいと願って止まない彼女自身に、師事する？

いいのかそれは。

間違っていないか、それは。

未だ全く釣り合っていない僕が、この人と触れ合うような真似なんか。

そもそも、【ファミリア】の間に生じる問題が――。

頭の中をぐるぐると回る数々の問いかけ。けれど、それらが全て本音を必死に隠す鍍金^{メッキ}に過ぎないことは、わかってしまっていた。

この人と喋^{しゃべ}って、知って、笑って、時間を共有したい。

想う気持ちだけが馬鹿みたいにでかい恋心が、彼女と少しでも一緒にいたいと、心の奥から

望んでしまっている。

胸の中の憧憬が張り裂けそうになりながら、僕はとつくに決まってしまうている答えを、ひたすら悩み、探し、考え続けた。



「……」

ことあるごとに顔を赤熱させ深く考え込んでいるベルを、アイズは静かに見つめる。

アイズが先程告げた申し出の理由に、確かに嘘はない。ベルの言葉の端々から感じ取れた高みへの欲求に共感を示した、これは事実だ。

そして無論、そこには善意だけではなく、打算がある。

最初の違和感は、シルバーバック。

次は10階層進出。

アイズ自身が見て聞いてきたベルの軌跡には、この短期間にそぐわない確かな戦果と目まぐるしい『成長』が存在する。

ミノタウロスの一件から邂逅を果たした、あの未熟であった筈の駆け出し冒険者は、アイズの興味を引き寄せるほどの大きな躍進を遂げていた。

（知りたい……）

ベルの『成長』の秘密を見極めたい。突き止めたい。

己自身のために。

アイズが師事を提案したのは、その意図が大きく関係してのことだ。

「このままじゃ申し訳が……いや、でも、せつかくの善意……」

「……」

同時に、ともすれば、罪悪感も覚える。

こちらの申し出を純粋な厚意だと信じている少年に、胸が音を立てて疼きそうになった。

頭を抱え眩きも漏らしているベルの前に、アイズはそつと目を伏せ。

腰に佩いている剣の柄を、握った。

己の迷いを断ち斬るように。

「……あ、あの、ヴァレン、シュタインさん……」

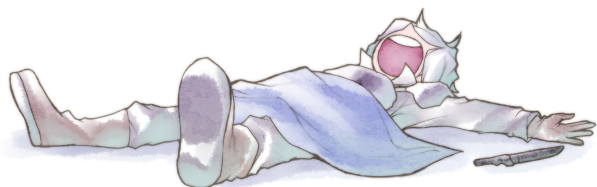
視線を上げる。

顔を相変わず火照らせている白髪の少年が、それでも真っ直ぐな瞳で、アイズに勢いよく頭を下げた。

「ご、ご教授を、よ、よろしくお願いします！」
報いようと。

彼の期待に応えようと、自身のやましい心を謝罪する代わりに、アイズはそのひた向きな深紅の瞳を見て、そう思った。

「……うん。よろしく、お願いします」



3巻試し読み版はここまで！
続きは絶賛発売中の本編にてお楽しみ下さい

試し読み版

ダンジョンに出会いを求めるのは 間違っているだろうか 3

発行 2013年5月31日 初版第一刷発行
著者 大森藤ノ
発行人 小川 淳

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒106-0032
東京都港区六本木2-4-5
電話 03-5549-1201
03-5549-1167 (編集)

装丁 ヤスダスズヒト
株式会社ケイズ (大橋勉/彦坂暢章)

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを
することは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©Fujino Omori